最近、霞ケ浦や桜川で、奇形の魚がとれるようになった。背びれのないもの、体が曲がり、はりがねのようによじれているもの、エラのとろけているもの、腹が破れて内臓が飛び出ているもの。そして形が満足な魚でも、悪臭が強く、食べられないものが多いという。

水もまたひどく汚れた。漁民は一昔前まで、湖の水を桶に汲み、飲料水としてそのまま飲んでいた。ところが今は、工場や都市の排水、養豚のし尿の流入などでみる影もなく汚れてしまった。

白帆とワカサギ、桜のトンネル、そんな土浦のイメージは、まるで遠い日の夢のように消え失せた。

そして街の道路は、車の洪水。子どもたちは遊び場を失ない、大人もまた、のんびりと散歩を楽しむことも出来なくなった。

私たちは、このように急速に変貌をとげつつある土浦の自然を守るため、ささやかな市民運動をすすめている。そしてこの小さな雑誌「桜川」は、私たち会員相互の認識を深め、かつ土浦の人々の、一層の理解と協力をうるために発行された。

私たちの環境は、どうあるべきなのか、人間は、自然と調和しつつ生きてはゆけないものなのか、そういったことを、「桜川」を通じて、みんなで考えてゆきたいと思う。